

永昌寺えいしょうじというお寺の門を入ると、正面にりっぱな玄関があり、そこを右にまがると、また小さな門があつて、そのつきあたりが道場でした。

けいこは、夜も昼も行われ、夜ふけになることもありました。

はげしいけいこが続くと、もともと道場としてつくられた建物ではないので、道場の床ゆかがゆるんできます。小がらな四郎は、そのたびに、床下ゆかしたにもぐつて床を直さなければなりませんでした。

住み込みの弟子である四郎は、けいこのほかにもやらなければならぬ仕事がありました。自分の家から道場に通ってくる金持ちの弟子たちの、けいこ着を洗ったり、修理したりしなければなりませんでした。寒い日などは手がこごえて、投げ出したくなることもありました。

ある冬の日のことです。道場のそうじを終えて、手桶てびくのよごれた水を捨ててくると、暮れやすい冬の空は、だんだんどうす暗さを加えてきました。足早あしはやに